

## 授業にディベートを

## 知識探求型の授業への転換

国際社会に生きる日本人を育成するためには、学校教育において、自己を主張するコミュニケーションの意義と方法を教えなければなりません。しかし、現実はどうでしょうか。子どもたちにコミュニケーション能力は身につけているのでしょうか。

国語の授業などで、討論の授業を試みた人は多いと思います。しかし、どのくらいうまくいっているでしょうか。うまくいかずに、討論の授業をやめてしまった人はいないでしょうか。どうも盛り上がり欠ける。よく話す子どもと黙ってしまう子どもが生じてしまう。意見が出されても、単発で尻切れとんぼで終わってしまう。このような悩みをもった人は多いのではないのでしょうか。

ディベートで討論の授業ができて、それだけで終わってしまい、教科の内容を学習するためにはなっていないのではないかと。こういった疑問もあるでしょう。これは、目的としてのディベートと方法としてのディベートの区別の問題です。つまり、ディベートを教えるか、ディベートで教えるかの問題です。

授業にディベートを導入することは、単に討論の方法としてディベートを使うということではありません。知識伝達型の授業から知識探求型の授業への転換を図ることです。国語の時間に探求型の授業を仕組もうとすると、学習課題や発問がその成否を握ることになります。教材分析や教材研究の成果が問われるということです。これは、なかなか容易ではないハードルです。まずは、ディベートを授業に取り入れることで、授業の活性化を図り、探求型をめざしてはどうでしょうか。

## ディベートの定義

一般的な討論とディベートとの違いは何でしょうか。ディベートとは、一定のルールにもとづいて行う討論のゲームです。ディベートは討論の一つです。普通の討論との大きな違いは、ゲームとしての討論だという点です。これがディベートの特徴でもあります。

ディベートがゲームとして成立するためには、一定のルールが必要です。以下のようなルールです。

- 論題を決める。
- 形式的に肯定側・否定側の2つの立場を決める。
- 立論・反対尋問・最終弁論の3つの要素が必要である。
- 勝ち負けの評価をする。
- 時間を決める。

他の討論との決定的な違いは、形式的立場のルールと勝敗のルールがあることです。この2つのルールがなければ、ディベートとは言えません。この2つのルールが、討論を活発にするための重要な条件になります。